AERA
SUITS & VIEWS
For MEN

STYLE MAGAZINE

VOL.30 SPRING 2016

30TH ANNIVERSARY

「世代別スーツ」「TODOリスト」
着こなしルールが変わった！

LONG INTERVIEW

キング三浦知良、プロ30年を語る
「キャリアなんて関係ない。
大切なのは、いまの力を見せること」

ノーナ出版 NO.14 4月上旬号
昭和63年6月10日第3種郵便物認可 2016年4月11日発行（毎月1回3・24日（水）発売 価格1300円

三浦知良の30年。

妥協のない、1分1秒を積み重ねて——

LONG INTERVIEW

Photograph:Megumi Seki
Styling:Daisuke Ishii(mybox)
Hair & Make-up:
Kazunori Miyasaka(mod's hair)
Text:Haruo Isshi

2016年、日本サッカー界を代表する孤高のレジェンドが、プロ契約30年という節目を迎えた。ブラジル時代、Jリーグ発足時から日本代表での栄光と挫折、欧州リーグへの挑戦、逆境からの再起、そしてこれから——。「小さなことを毎日コツコツやっているだけ」と笑う男の、ストイックな人生を浮き彫りにする。

ベトナムでのチーム合宿を終えて帰国したのは、前日の朝6時のことだった。翌日から、今度は宮崎での2週間のキャンプに入ることになっている。

Jリーグの開幕戦を控え、カズのスケジュールは日に日にタイトになってきていた。その48時間足らずのつかの間の休息時間を割いて、カズは、東京・青山にあるテーラー「サルトリア チッチオ」へとやって来た。

この日の午後、この隙間にしか、フィッティングの時間が取れなかったのである。疲れはたまっているに違いないのだが、そんなそぶりを見せることもなく、カズは、チッチオこと上木規至の仮縫いに応じはじめる。この日は、2度目の仮縫いをすることになっていた。

姿見の前でカズが吐露する。

「キャンプに入っているときは、2週間ぐらいずっとジャージーや練習着ですからね。あるいはバーカーみたいなやつとか。それはそれでストレスがたまるんです。だから、東京に戻って来ると、ちょっとカフェに出かけたりするだけでも、ちゃんとした服を着たくなる。やっぱり、スーツを着ると気持ちが引き締まります」

上木は、寸分のミスも犯すまいとばかりに、黙々と生地に糸を通しつづけている。カズはその作業をちらちらと姿見で確認する。二人だけにわかる静かな対話がスーツを通じて交わされているかのようでもある。

カズと上木は、こうした作業をこれまで何百回となく繰り返してきた。上木がカズのために仕立てたスーツは、すでに50着を数えんとしていた。

＊

カズが上木と最初に出会ったのは、2007年のことだ。上木はそのころ、東京・青山の「タイユアタイ」に籍を置き、フリーで仕事を受けていた。

このときにチャコールグレーの冬用スリーピースをオーダーしてからというもの、カズは、その後仕立てるほとんどのスーツを上木に委ねることになる。上木と出会ってから、カズは、既製服を一切買っていない。

カズはなぜ上木のスーツをまといつづけるのか——。

上木は、大阪・貝塚にある紳士服の工場で働いたのち、本場ナポリへと渡った仕立て職人だ。渡伊後、語学学校に通いながら、職人を10人ほど抱えるナポリ市内の仕立て屋で働いていた。1年半後、やはりナポリにあるアントニオ・パスカリエッロの店へと移る。上木のほかにわずか2人の職人がいるだけの小さな仕立て屋だったが、

三浦知良（みうら・かずよし）
1967年、静岡県出身。言わずと知れた日本サッカー界のレジェンド。プロフェッショナルリーグでプレーする、世界最年長のプロサッカー選手（横浜FC所属）として、今後も活躍が期待される。

上木規至は、いまや国内のみならず海外の一流ブランドからも注目される気鋭のスーツ職人。しかしそのことを、彼自身が語ることはあまりない。

仕事のレベルは抜群に高かった。

上木が言う。

「ナポリの仕立て屋は遠くで見ると格好いいんですけど、近くで見ると仕事が粗かったりするところも多いんです。でも、アントニオは、汚い仕事が嫌いで、いい職人しか囲わない人だった。だから、その少ない職人でこなせる仕事だけしか引き受けないんです」

上木が最初に任されたのは、ジャケットの背中にステッチを入れる仕事だった。

「それは、前の仕事場では駆け出しのころから当たり前のようにやっていたことでした。だから、ささっとやって渡したんです。そしたら、アントニオから『汚い。やり直し』と突き返された。まさか、ナポリ人に仕事が汚いと言われるとは思ってなかったんですけどね(笑)。それで、全部ほどいて、やり直して見せたら、オッケーが出たんですけど」

75歳でなおも現場に立つアントニオから学んだのは、「スーツもまたファッションである」ということだった。

「日本だとスーツは仕事着と受け止められていると思うんですけど、実は、おしゃれのために着る服なんですね。それこそ70歳のおじさんが、どう格好よく見せるかを考えて着るような。ああ、スーツとは仕立て文化のファッションなんだと、日本の工場で働いているときにはまったくわからなかったことが理解できたんです」

3年半後、帰国した上木は、「タイユアタイ」での仕事のあと、自身の店「サルトリア チッチオ」を2015年に青山で立ち上げた。現在は、3人の職人とともに生地と向き合う日々だ。

「この仕事には終わりがない。どこまでも、『こうしたらもっとよくなるんじゃないか』を探しているような感じです」

そんな上木のひたむきな姿勢をカズは支持しているのだろう。

カズは、上木との服づくりに関してこう言う。

「スーツを着てみて、『これはセクシーじゃないんだよね』という抽象的な言い方しか僕はできない。でも、じゃあ、僕のセクシーってどういうものか、ということになるでしょ。色気がない、と言っても、普通はわからないよね。でも、チッチオはそのニュアンスをなんとなく汲み取ってくれて、それを直してくれる。直したやつを着てみるとだいぶよくなっている。そういう作業を二人で繰り返してきたんです」

そして、カズはこう続ける。

「僕は、技術的なことはわからないし、腕がすごいとかいうことも

よくはわからないんです。でも、これまでに、チッチオとは何回もメシを食いに行っている、カフェにもカラオケにも行っている。そんなときの会話の7、8割は洋服の話をしているけど、サッカーの話も、女性観についても話している。だから、僕が『セクシーじゃない』と言ったときに、どういうことを言わんとしているかがわかるんだと思う。あるいは、『なんか、ボテっとしているんだよね』と言ったときの『ボテっ』をわかってくれる。でもね、二人がいまみたいに阿吽の呼吸でわかるようになるまでには、7、8年かかっているわけですよ」

そんな二人がつくり出すスーツだからこそ、誰にもまねのできない、かけがえのない一着となる。

「僕の生き方や考え方、サッカーに対する気持ちを、チッチオはスーツにつなげていく。だから、そのスーツを見たときに、すてきだと感じるんです。そんな思いがこもっているからこそ美しい。チッチオは、僕の人生のすべてが詰まった服をつくってくれているんです」

＊

カズは、この2月で49歳になった。ブラジルでのプロ入りからまる30年が過ぎ、今シーズンはプロ31年目ということになる。もちろん世界中を探しても、30年の長きにわたってピッチに立ちつづけているプロ選手は見当たらない。

カズのシーズンは、毎年1月のグアムでの自主トレで幕を開ける。10日から14日間の自主トレをこの十数年、自身に課してきた。

通常、Jリーグは11月末に最終戦が行われ3月に開幕する（今年は2月27日）。つまり、12月から2月いっぱいがオフシーズンということになる。もっとも、開幕の1カ月半から2カ月前には各チームとも練習をスタートさせるから、1年のうち、休みといえるのは実質1カ月ほどである。

だが、カズは、この休みを削って自主トレに充てているのだ。しかも、これまでは1月の合宿だけだったのに、一昨年からは、12月にも10日間のグアム合宿を組みはじめた。

裏を返せば、49歳の選手がサッカーというハードなスポーツを続けていくことがいかに困難になってきているか、ということでもある。自身のコンディションに神経質なまでに聞き耳を立てて調整していかなければ、もはやピッチに立つことは難しくなっているのである。40代に突入してからは特にその傾向が顕著で、この数年はさらに厳しい状況を迎えているのが見て取れる。

それでもカズは高みを見ている。

「いまは、プロの第一線でやっていける身体をつくれるかどうかしか考えてない。これ以上もう身体を鍛えることができない、これじゃあプロのレベルとして戦っていけないとなったら、自分でわかると思う。そのときは、もうしようがないでしょ」

カズが目指すのは、あくまでも第一線で戦えるプロフェッショナルだ。ただ顔見せでピッチに立つことなど、プライドが許さない。

「練習を半分にして、じゃあ、先発ではなくて後半の20分からだけ出られるようにしましょう、ということでチームがいいと言うなら、契約してくれるなら、もしかしたら、あと5、6年はできるかもしれない。でも、僕は先発で出られる身体をつくるためにトレーニングをしている。つまり90分間フルに出場したいということです。妥協して、20分でいいというのは、自分の流儀じゃない。少なくともいまはそういう考えはまったくないですね」

そんな強い気持ちがあるから、カズは、グアムの自主トレも2回に増やしたのだ。

カズのグアム合宿には、トレーナー、フィジカルコーチ、料理人、用具メーカーの担当者らが帯同する。その渡航費用等はカズが自己負担してきた。ばかにならない金額だが、そんな投資をしてでも、サッカーを一瞬でも長く続けたいという思いが勝る。

グアム合宿の朝は、いつも闇の中で始まる。

5時過ぎに起床したカズは、ホテルの自室で、ストレッチや体幹トレーニングなどを45分ほど行い、身体をまず目覚めさせる。その後、GPSのついた運動計測時計「ガーミン」を装着し、グラウンドに出て、ランニングを二十数分とダッシュなどをこなす。

部屋に戻り、足にアイシングをしてから朝食。白米、味噌汁、サラダ、塩鮭(焼き魚)、納豆、肉じゃがのような日替わりの副菜が一品か二品にフルーツというのが定番だ。

朝食後の午前中はボールを使ったフィジカルトレーニング。午後には、筋トレを中心とした体幹やバランストレーニング、ストレッチと続く。それぞれの練習のあとには、クールダウンを兼ねて、併設プールで50メートルほどを流して泳ぐ。これを毎日愚直なまでに繰り返すのだ。

「確かに毎日続けていくって大変なことだけど、でも、みんなだっていろんな仕事を毎日続けているわけでしょ。努力しているのは、僕だけじゃない。世の中には、僕以上に努力している人はたくさん

いるんです。別に僕が特別なわけじゃないと思うけどね。僕はやっぱり恵まれてもいるんですよ。契約してくれるチームもあるし、こうやって支えてくれる人たちもいるわけで」

海から離れた山中。娯楽施設もない。ひたすら自身の肉体と向き合う日々なのだ。

「東京の日常は忙しすぎる。横浜のクラブハウスまでは移動に30分かかるし、初動負荷のトレーニングをする自分の部屋までまた30、40分は必要。あるいは、銀行へ行かなくちゃならない、誰々が会いたいと言っている、家族に会いに行く、といろんな用事があるから。

でも、グアムでは人に会う必要はないし、本当に集中力が増すんです。どんどん身体が研ぎ澄まされて、余分なものがそぎ落とされていく感じ。だから、もっと長くいたいぐらいです。気候も文句ないし、グラウンドまでも歩いてすぐだし、走ったあとには、そのままプールに入れる。筋トレルームもすぐ近くにある。ここにいれば移動時間が必要ないし、クルマの運転もしなくていい。煩わしさが一切ないんです」

飽きることなくコンスタントに練習を続けられること。ケガをしないこと――。プロ選手としてスポーツを続けるための絶対条件をカズはずっと維持しつづけてきた。

もちろん、小さなケガや故障は少なからずあった。とりわけ、この数年は増えているような気もする。しかし、ケガを最小限に食い止めるために、カズは万全の手を打ってきた。

たとえば、それぞれの練習後には、17年前からどこに行くにも必ず傍らに寄り添うトレーナーの竹内章高によるマッサージや治療が待っている。

実のところ、この竹内の細やかなケアがなければ、カズがここまで永らえるのは不可能だったと言っていい。痛みや張りがあれば、竹内がその芽をすぐにつみ取り、被害を最小限にとどめてきたのだ。その成果でもあるのだろう、カズは、自身の身体に一度としてメスを入れたことがない。身体のきしみが年々増えているという現実を前に、カズと竹内は、綿密に意見交換をし、ベストの道を探しつづける。

繰り返すが、カズは49歳のサッカープレーヤーなのだ。しかも、まる30年、第一線でプロとして戦いつづけてきた選手なのである。身体が満身創痍の状態であることは容易に想像がつく。

6年前、カズがこんなふうに言ったことが忘れられない。

「過酷なことをやってきたツケとして、選手をやめて普通の生活

に戻ったとたん、リバウンドが起きて歩くことさえできなくなるんじゃないか、という恐怖もある。90分走れる身体がいったいいつまで、どこまでもつものなのか、未知すぎてわからない」

この10年、そんな恐怖を感じつつ、カズは自身の身体を追い込み、鞭打ってきたのだ。

＊

カズがブラジルのサントスFCでプロデビューしたのは1986年2月のことだ。このとき19歳。日本人プレーヤーは、屈辱を味わい、時に嘲笑されながらも成長し、やがて誰もが知るトッププレーヤーへと駆け上っていく。

1990年に帰国したカズは、1993年のJリーグのスタートとともに、日本サッカーの顔として走りだす。「ドーハの悲劇」を味わったあと、アジア人として初めてイタリア・セリエAの門をたたいたカズは、その後も日本代表のエースとして君臨しつづける。

しかし、1998年6月、ワールドカップフランス大会の直前、カズは、日本代表をはずされてしまう。日本中に衝撃が走り、誰もが失望した。ましてや、「日本をワールドカップに連れて行く」と言ってブラジルから帰国し、その後も旗を振りつづけてきた本人の失意はいかばかりだったか。

カズは悔しさを呑み込み、次のステージへと向かっていく。カズが選んだ新天地は、クロアチアリーグだった。

「一回日本とは違うところでゼロからやりたかったんです。外へ出たかった。あそこで、ほかの国じゃなくてクロアチアという選択をしたことが大きかった。クロアチアで生活した8カ月はいま僕がサッカーを続けていることにつながる大きな分岐点だったと思う。ディナモ・ザグレブでゴラン・ユーリッチという選手と会って、サッカーを楽しむと同時に人生を楽しむことを学んだんです。彼がオフの時間の使い方、ファッションや食、生きる姿勢、そんなものを見せてくれて、サッカー選手として大人にしてくれたんです」

帰国したカズは、1999年、トルシエ監督のもとで日本代表に再び招集され、2000年の国際Aマッチでは2得点を挙げた。クロアチアがカズを再びよみがえらせたのである。

カズは、その後、J1のヴィッセル神戸に所属していた2005年7月、現在も所属するJ2の横浜FCへと電撃移籍する。

いまでこそJ1からJ2への選手の移籍は珍しくないが、カズがJ2へ移ってまでもサッカーを続けようとしたことは、当時驚きを

きなサッカーで、ずっとお金をもらってきているわけだから、本当に感謝しています。サッカーがなきゃ僕には何もないからね」

カズは、一プレーヤーとして、いつもこんなふうに思っている。

「サッカー選手でいちばん大事なのは、サッカーの試合に出て活躍したいという、この気持ちです。僕はベテランとか最年長とか言われても、活躍するためにサッカーをやっているんで、別に若い選手に僕の背中を見せるためにやっているわけではないんです。たとえ高校を出たばかりの人が入ってきても、後輩とは思わない。もちろん上から目線もないし、単なるサッカーの仲間であり、ライバルとしか思っていない。30歳下だからって別に僕から強制するものなんてひとつもないんです。

とにかく今日が大事で、昨日は過ぎたこと。キャリアなんて関係ない。僕自身は自分が経験してきたことが大切なだけで。今日、いま、自分の力を見せるのが大切なことで、昨日は関係ないんです」

しかし一方で、カズには、プレーヤーとしてだけでなく、日本サッカー界の顔としての役割が期待されているのも事実だ。それはときに、「政治的な動き」をともなって、カズを取り囲んでくる。

たとえば、カズは、2012年、日本サッカー協会の要請でフットサルの日本代表に呼ばれ出場している。ブラジル時代に多少経験があるとはいえ、フィールドサッカーとは勝手の違うこの競技に参加せざるを得なかったのは、やはり「政治的」と言えなくもない。しかし、カズは参加を決断した。そして、実際、依頼者の思惑どおり、日本のフットサルは脚光を浴び、広く人々の知るところとなったのだ。

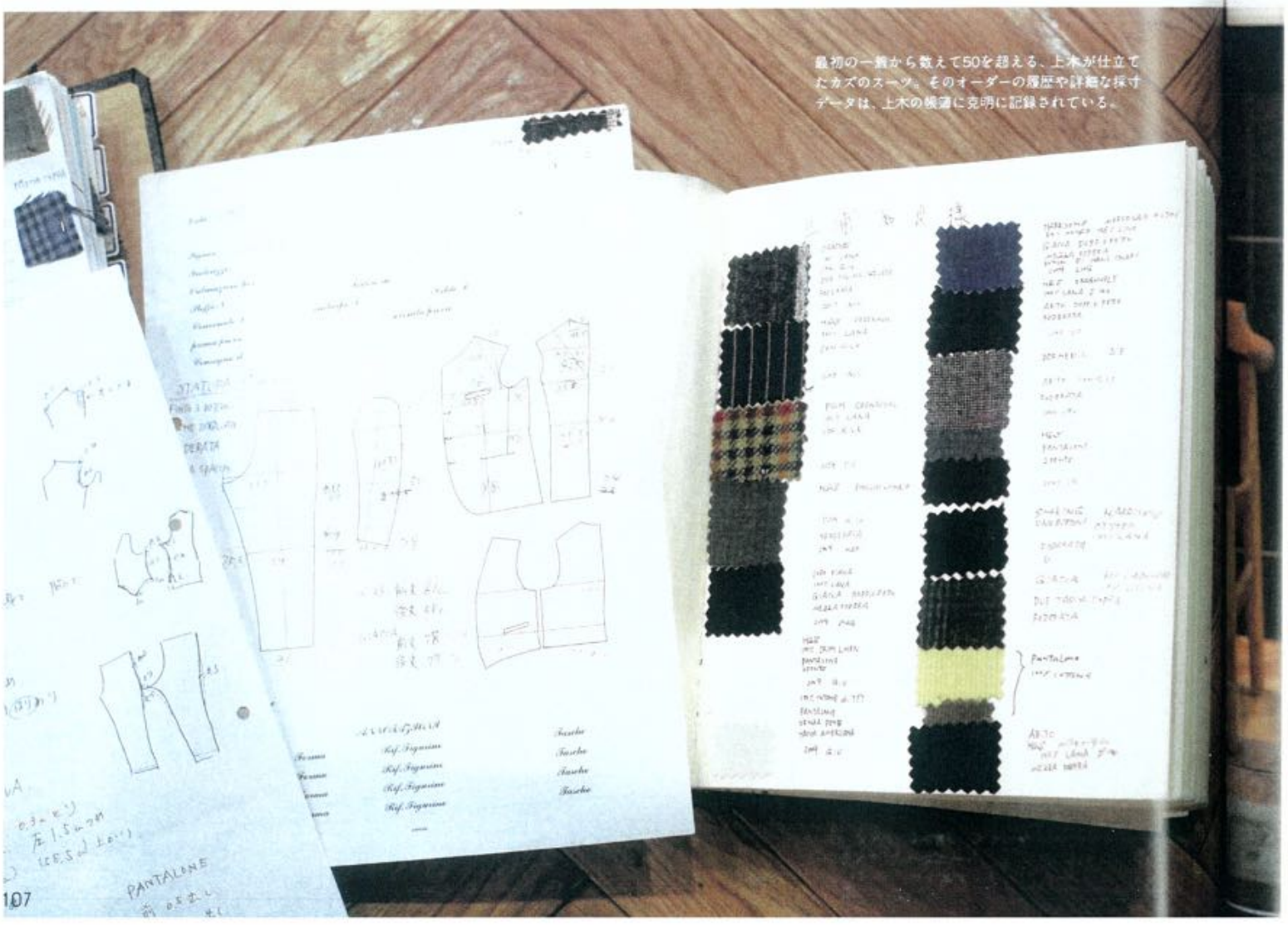
「客寄せパンダ的な利用のされ方をするのは嫌じゃないですか」とあえて意地悪く質問してみた。すると、カズはこう一笑に付した。

「J2でも、横浜FCでもよくそう言われるし、書かれているじゃないですか。でも、パンダじゃなきゃ人は来ないですから。その役割は自負していますよ。僕は客寄せパンダで十分ですよ。だって普通の熊じゃ客は来ないんだもの。パンダだから見に来るんだもの。熊はパンダになれないんだから」

30年にわたってプロの世界でトップに立ちつづけてきた男の矜持である。

＊

開幕戦2日前の2月26日、横浜FCでの練習を終えたカズは、クラブハウス内で49歳の誕生日を祝った。雑誌や新聞、テレビのカメラが多数待ち構えるなか、練習着



最初の一着から数えて50を超える、上本が仕立てたカズのスーツ。そのオーダーの履歴や詳細な採寸データは、上本の横浦に克明に記録されている。

もって受け止められた。このときカズは、すでに38歳になっていたから、当然引退、という選択肢があってもおかしくなかった。

しかし、実は、この移籍の前年、カズは、大きく生活を変えていた。栄養士の指導のもと、毎日の食事を根本から見直したのだ。

栄養士から、「基本的に高たんぱく低脂肪を」と指導されたカズは、油を徹底的に避け、肉もサーロインや霜降りのステーキから脂の少ないフィレに切り替えた。ドレッシングもやめて、オリーブオイルと塩にした。揚げ物などもってのほかだった。その日に摂る食事の写真を撮って、栄養士に送って、可否を尋ねたりすることもあった。鉄分が足りないとわかると、1週間にわたって毎夕レバーだけをレストランに食べに行った。とにかくストイックなまでに食事に気を遣いはじめたのである。

それは言うまでもなく、「引退」という言葉を遠ざけるためのよすがだった。

いまでこそ、カズの食の「自由度」は増しているものの、バランスを考えた食事を意識しつづける姿勢は変わらない。

先のグアム合宿ではこんな場面も見た。練習後、自室のソファーに座ったカズが一冊のノートをじっと眺めていたのだ。何かなと思ってのぞくと、そこには毎日の体重、走行距離、トレーニングメニューなどが自身の手書きでびっしりとメモされていた。もう何年も前から続けているのだという。

プロ選手としてピッチに立つための努力と投資をカズは惜しまない。いまなお、若者たちと同じトレーニングをし、試合をこなしていく身体を維持できているのは、こうした不断の努力があればこそなのだ。

と同時に、身体を支えるメンタリティー、とりわけポジティブな考え方がまるで失われていないことも現役でいられる大きな理由だ。「サッカーへの思いとか情熱、やる気は昔から何も変わってない。逆に10年前より増しているかもしれない。12月、1月のキャンプだって、本当に1分1秒を大事に、妥協しないでやっているし。確かに前よりもやるべき細かい作業が多くなったし、マッサージ、筋トレ、ストレッチを含めて、時間はどうしても長くなってきているのは事実です。でも、一日はあっという間で、楽しい。幸せだよね、これだけサッカーがやれて。

自分ひとりではここまでこられなかったからね。グアムに行く仲間や、チームメート、サポーター、メディアのおかげで自分のモチベーションは維持できている。大好

を脱いだカズは、真っ青なチームカラーのスーツに着替えて現れた。

先の「サルトリア チッチオ」での仮縫いのときに試着した一着で、そこでは、「演歌歌手みたいだ」「横山やすしさんの服みたい」と周囲から散々茶化されていたが、内側に茶系色のベストを挟んで出てきたカズは、その鮮烈な青色を見事に着こなしていた。

上木が解説してくれた。

「カズさんは、基本的にはシックな色が好みです。でもああいうスターですから、自分がこういうものを着ると、人が喜ぶとか、そういうのを意識されているんじゃないか、と思うんです。だから、派手なジャケットとかもチョイスされる。特にお誕生日とかは、一昨年は真っ白のスーツ、昨年は赤のスリーピースでしたからね」

カズはファッションを心の底から楽しんでいる。

「びしっと着飾ることが自分のなかでストレス解消になっているんです。今日は、どんなスーツを着て行こう、ネクタイは？　靴は？　と想像するだけでワクワクする。ちょっと組み合わせを替えるだけで自分のなかでは面白かったりするし。チッチオと、丈の長さ、ウエストの絞りとかで0・5センチをどうするかと話したりするのも本当に楽しいんですよ」

上木は、カズのスーツには特殊性があるのだと明かす。

「やはり0脚ですし、臀部がすごく発達しているんです。ウエストのくびれからお尻の張りに独特なものがある。お尻が後ろに向かって出ているような感じなんです。太腿も張っているので、普通のパンツだと太腿部がパンパンになってしまう。だからそこは少しゆったりめにするんですけど、カズさん自身は細いのが好みなので、そこをうまく微調整しているんです」

そんな体形もまた、カズの生きてきた道の証しなのだ。

屈辱にまみれ、怒声を浴びた日々。栄光と称讃に包まれた日々。トレーニングを繰り返し、鍛え、食事を制限し、一瞬一瞬を戦い、楽しみ、そんなものがすべて混じり合い溶け込んだ人生。

「スーツの中に僕の生き方や考え方、サッカーに対する気持ちが入っているから、すてきなんだ」――。

カズのスーツには、そんな49年間の人生が詰まっている。

文／一志治夫（いっし・はるお）
ノンフィクション作家。『狂気の左サイドバック』で第1回小学館ノンフィクション大賞を受賞。『足に魂こめました―カズが語った〔三浦知良〕』『たったひとりのワールドカップ―三浦知良、1700日の闘い』ほか、著書多数。

〈取材協力〉サルトリア チッチオ
東京都港区南青山5-4-43　☎03-6433-5567
http://ciccio.co.jp/